紅山文化の所謂馬蹄形玉箍について

林　巳奈夫

紅山文化の墓から近時図1、3のやうな軟玉製品が発見され、馬蹄形玉箍、籠形器等と呼ばれてゐる。[1] 用途については髪飾りで髪をこの器の筒の中に納めるものとする李文信の説が引かれてゐる。[2] この式の器の原型と同途について筆者の考へを記しておきたい。

この式の器は一方が少し拡がつた筒形に作られ、細い方の口は中軸とほぼ直角に切られ、太い方の口は斜めになる。斜めに切られた口の一番突出した部分のある側を下にして平らに置いた時、筒は上下方向にややひしやげてゐる（図2～4）。寸法は各図の下に示したやうに、大体最長一〇～二〇㎝。太い側も細い側も大体楕円形をなすものもあるが、図5、[3] 6のやうに、太い側の口が顕著に隅円の梯形に成形されたものがある。図1も写真ではわからないが、太い側の径の寸法書きからみると、同様な形に作られてゐるらしい。

この式の器で注意すべきことは、一番突出した部分一帯が斧の刃のやうな形に成形され、口に近い所が磨滅してゐるもののあることである。図3について報告に「開口縁部は刃状を呈する」と記され、[4] 写真でも見る通り、石斧や玉斧の刃の部分に時折見かける、長期の使用の結果生ずる平行の溝が顕著に生じてゐる。図2についても報告に「斜口の一端辺は薄く鋭く刃に似る」と記される。[5] 図6の遺物も同部分が内より外壁に向つて刃状に斜面がつけられ、縁には、写真にうまく出てゐないが長期の使用の結果石斧、玉斧の刃に生ずるのと同じ、細かい溝が生じてゐる。[6] この使用痕は、この式の遺物がこの部分を何か硬いものに頻繁に突込む使ひ方をされたものであることを示す。

この種の遺物の用途、原型について筆者にヒントを与へてくれたのは図7の殷墟婦好墓出土の骨匕である。報告にブタの上腕骨をもつて作つたもので、長さ一二・二㎝、刃の幅三・二㎝だとあ

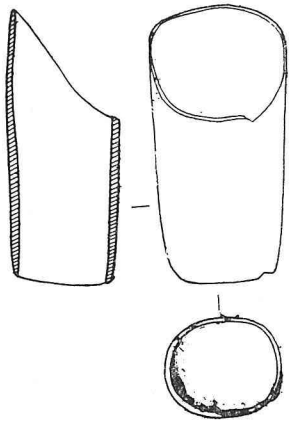


図２　所謂馬蹄形玉箍，凌源牛河梁，長16.4㎝

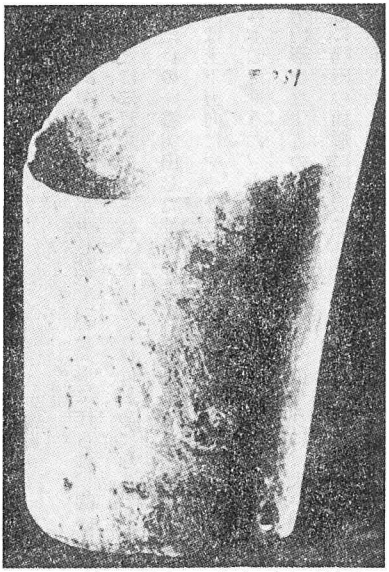
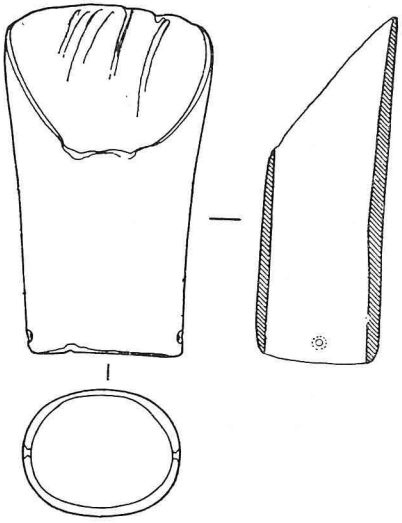


図１　所謂馬蹄形玉箍凌源三官甸子城子山２号墓，通長14.2㎝，太い側の口，径6.8～9.5㎝，細い側の口，径6.2～7.2㎝



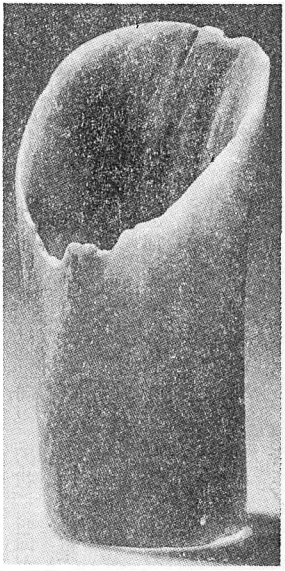


図３　所謂馬蹄形玉箍，凌源三官甸子Ｚ１，４号墓，通長18.6㎝，太い側の口，最大幅10.7㎝，細い側の口長径7.4㎝

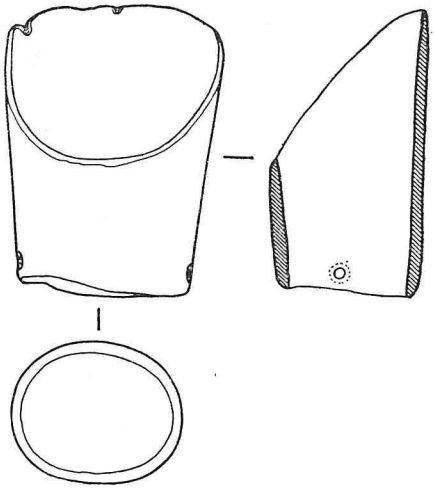


図4　所謂馬蹄形玉箍，凌源三官甸子Ｚ１，15号墓，通長11.6㎝，細い側の口長径6.7㎝

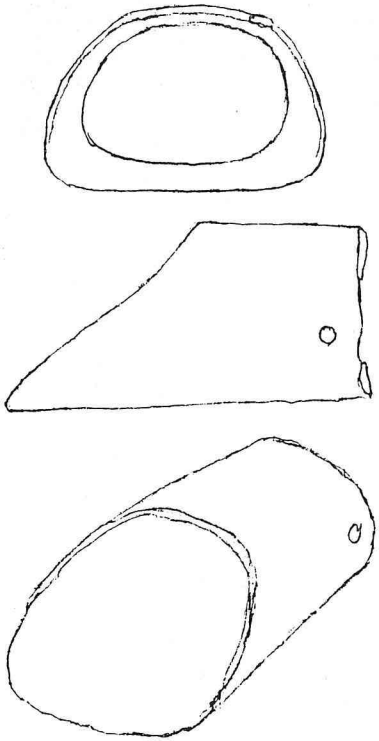


図5　所謂馬蹄形玉箍，「建平県牛河梁15号墓」，高13.4㎝，幅8.45㎝

図6　所謂馬蹄形玉箍，出土地不明，通長11.3㎝，太い側の口，最大幅8.0㎝，細い側の口，径6.6×5.3㎝，Courtesy of the Royal Ontario Museum, Toronto, Canada (Far Eastern Department)

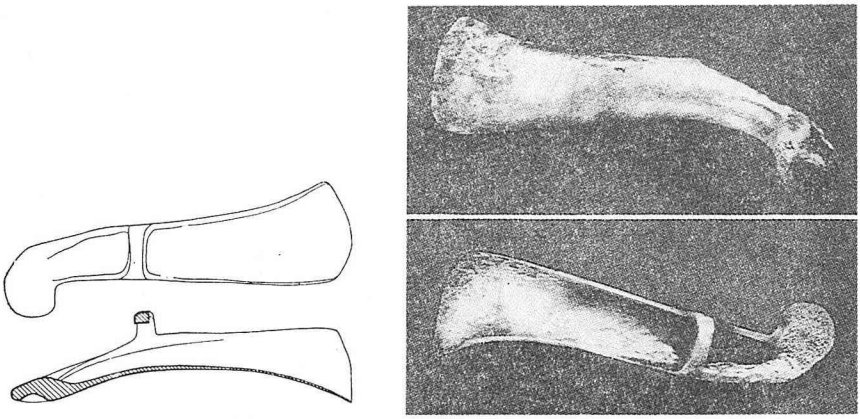


図７　骨匕，殷墟婦好墓，長12.2cm，先端幅3.2cm

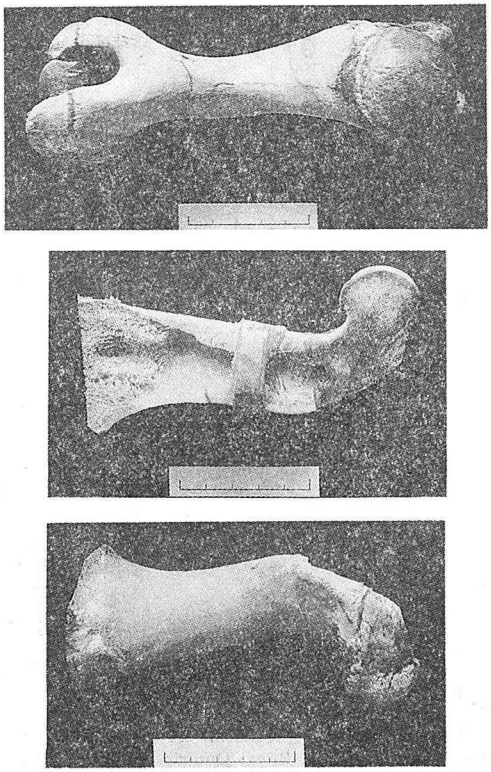


図８　ブタの上腕骨，それを切つて作つた図７の骨匕の半製品，中，下，長12.5cm

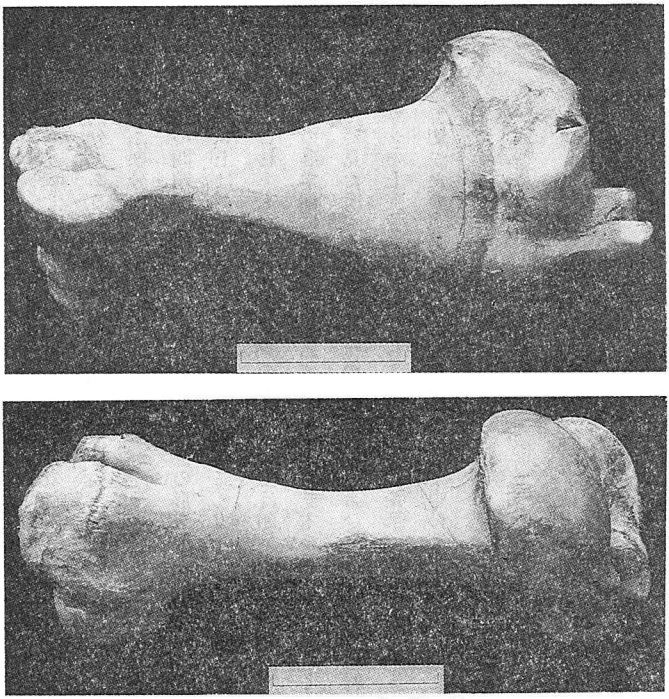


図9　ウ　シ　の　上　腕　骨

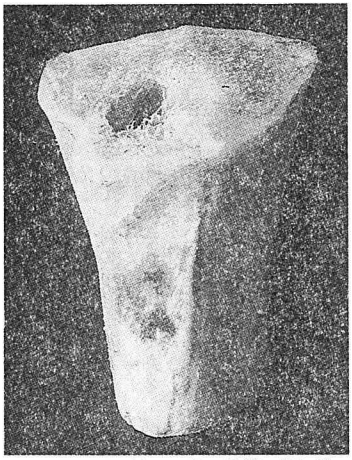


図10　図9の骨につけた鉛筆の印に沿つて切つた所

る。[7] 図8上は行きつけの食肉店から入手したブタの上腕骨。これをそこに鉛筆で印したやうに切つたのが図8中、下。これから海綿質を削り去つて仕上げると図7のごとき遺物となる。図8中、下は長さ一二・五cmで図7と寸法も合ふ。図8上の右側が肩胛骨に接続する部分である。その近く、平ために拡がつた所が図7の匕で物をすくふ部分に利用されてゐるのであるが、その形は図5、6の紅山文化の問題の玉器の太い側の口の突出部の形を強く思ひ起させる。図8上はブタの骨で幅広い部分の幅も三・四cmと小ぶりであるが、これをもつと大型のウシの骨で作つては如何[8]かと考へ、京都大学の農学部に保管されてゐるウシの骨骼標本を見学させてもらつた。[9] 見た所、大体紅山文化の問題の器と合ひさうである。改めてウシの上腕骨を同じ店から入手、図9に鉛筆で印をしたやうに鋸で切つたのが図10。骨の緻密質を残して中の海綿質を削り取り、内壁を平滑に仕上げたのが図11である（外側は自然のまま）。また上腕骨と相似て寛骨に接続する側に幅広く拡がつた部分を持つ大腿骨に同様な加工を加へ（図12、13）、仕上げを行つたのが図14である。

図11、中に見るやうに、ウシの上腕骨製のものは太い側の口からのぞいた形がほぼ梯形をなす点、図5、6と合ふ。図11は寸法も太い側の口で一番幅広い所で八・一cm、長さ一〇・六cmあり、図6の器で夫々八・〇cm、一一・三cmであるのとよく合致してゐる。ウシの大腿骨製のものは太い側の口からのぞいた形が図14、中に見るやうに、かなり平べたい点に相違が認められる。しかし上腕骨製のもの程角張つてはゐないが、同様梯形気味の形を持ち、これも紅山文化の問題の玉器の原型の候補に入れておいても差支へあるまい。

筆者の試作品は細い側が切つたままになつてゐるが、紅山文化の玉製品はこの側に底板を嵌めたと考へられる。図3、4、5のやうに細い口の近くに向ひ合つて一対の小孔が穿けられ、底板をより確実にとめるための釘の孔と解されるからである。図7の殷墟婦好墓のブタの上腕骨の匕の幅広い物をしやくふ部分に対応するのは図11、14のウシの上腕骨、大腿骨製の器の太い側の突出した幅広い側であるが、細い側を塞いだ上で婦好墓の匕と同様、この部分を使つて物をしやくへば、一段と大量のものをしやくひ取ることができよう。先に注意した紅山文化の玉製品のこの幅広の部分を刃状に薄くした構造、その部分の縁の磨滅は、このやうな用法を想定することによつて始めて解釈がつくであらう。

現在のところ紅山文化の遺蹟から筆者の試作したやうな遺物は知られてゐない。図15は寧夏同心倒墩子前漢中期の匈奴墓[10]出土の骨製品である。同じアイディアの作だが長さ五・四cmの小型品。

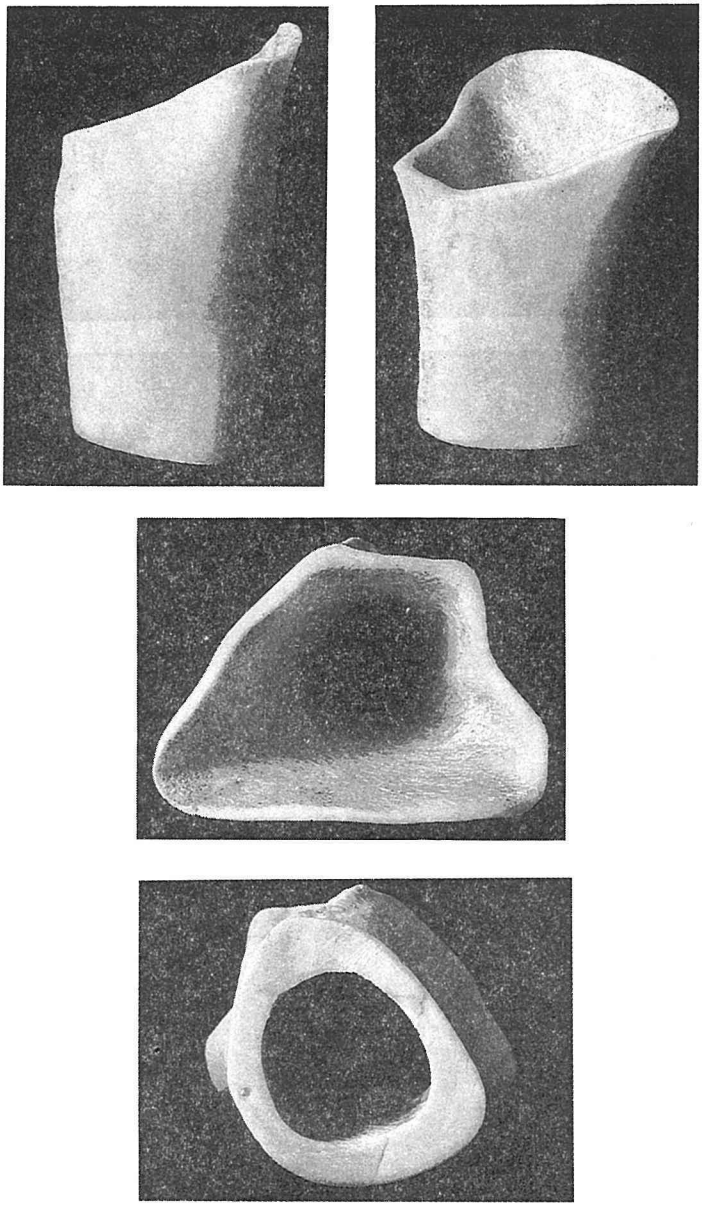


図11　図10から仕上げた所謂馬蹄形玉箍形の道具，長10.6cm，太い側の口，最大幅8.1cm

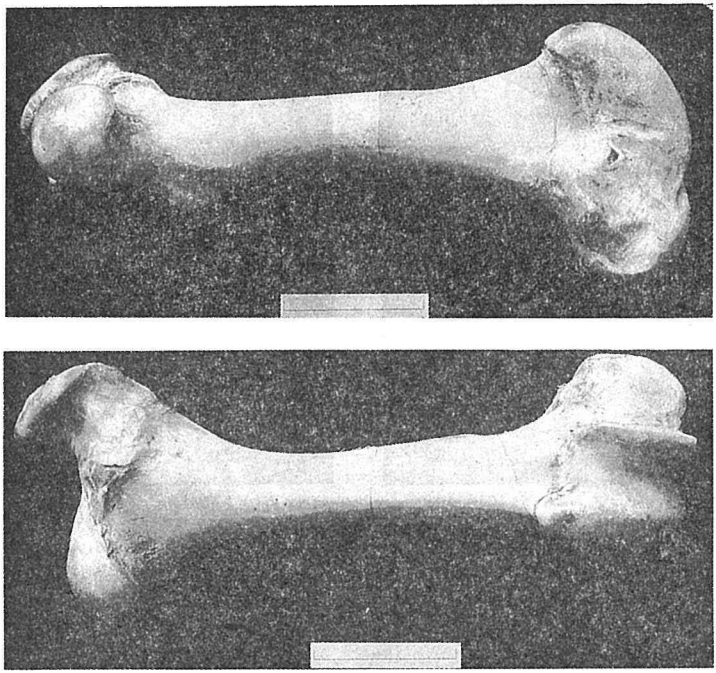


図12　ウ　シ　の　大　腿　骨

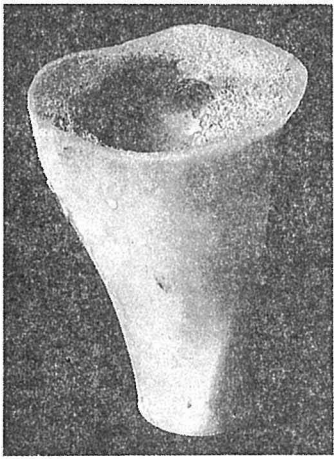


図13　図12の骨につけた鉛筆の印に沿つて切つた所

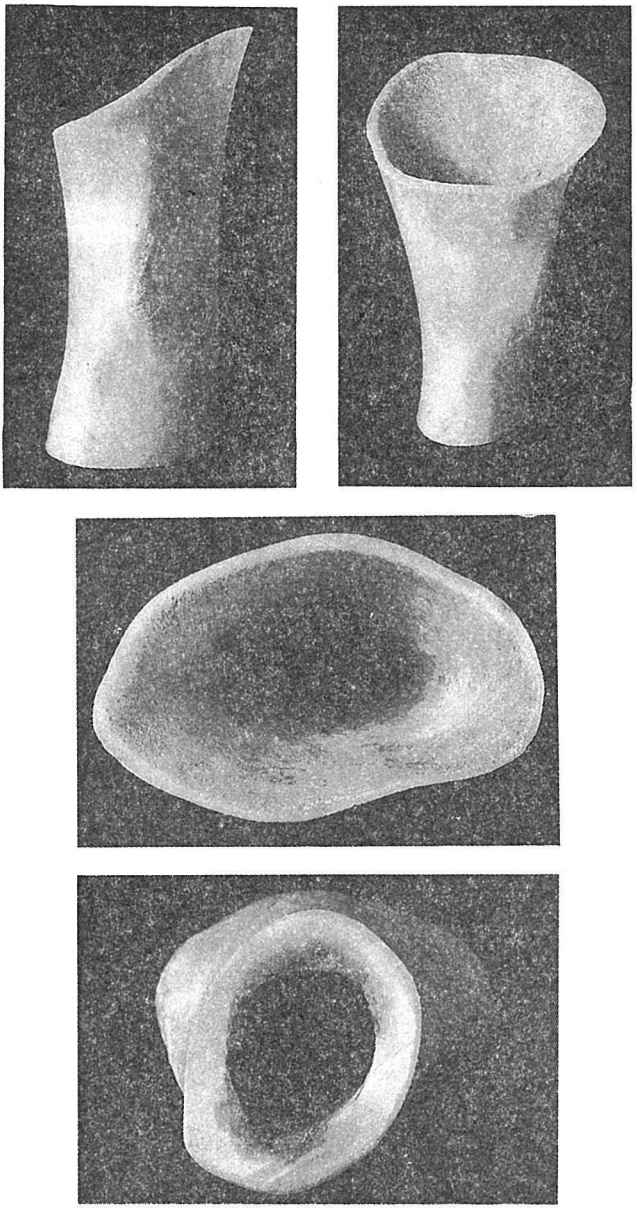


図14　図13から仕上げた所謂馬蹄形玉箍形の道具，長13.5㎝，太い側の口，最大幅98㎝

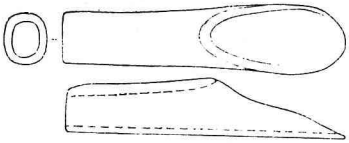
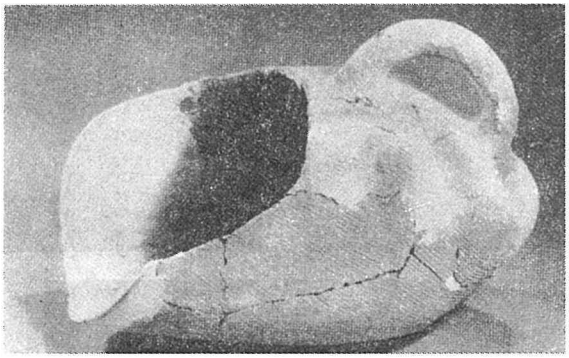


図15　骨匕　同心倒墩子匈奴墓，長5.4㎝



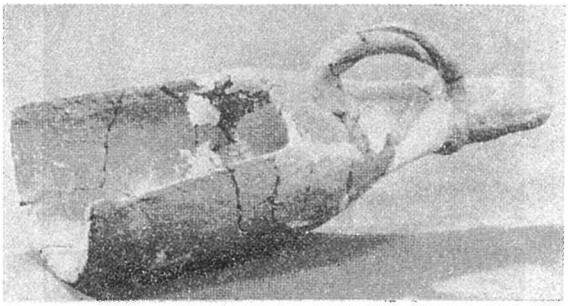


図16　大型柶形土器，秦安大地湾仰韶文化晩期901号房址，下，長47㎝

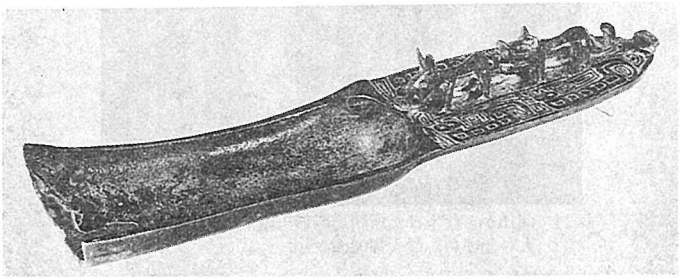


図17　殷青銅柶，長21.5㎝，大和文華館

図16はまたこれより遙かに時代が遡り、仰韶文化晩期の秦安大地湾九〇一号房址出土の土器。後すぼまりの筒状の本体に斜めに切つた口のつけられた形は問題の器に近似する。後部の把手と口の形から筆者が右に想定した紅山文化の玉器の用法と同様な使ひ方が推測される。この遺物の出たのは世界最古の人工軽量骨材セメント⑪の床をもつた一五mに八mばかりの大型建築址で、村ないし部族の集会場といつた祭祀、儀礼用の建物と考へられてゐる。⑫この遺物の寸法は下のものについてしか記載がないが、上のものも写真から見て相近い太さのものと見てよからう。紅山文化の玉器の二倍ばかりの大きさである。

紅山文化の問題の玉器が物をすくふ道具だとすると、一体軟玉のやうな貴重で、しかも硬くて加工に手間のかかる材質で作つて、何をすくふに使つたのであらうか。先に記したやうに口の縁の磨滅の具合からみて何か堅いものをすくつたことは間違ひない。殷代の物をすくふ青銅製の道具で図17のやうな柶がある。柶の用法の一つとして文献で知られるのは、死者の口に米を含ませる時にこれをしやくふ用法である。その用途にはすくふ部分の両側が雨樋のやうに高くなつた図17のやうな類が使はれたであらうことは、先に筆者の推測した所である。⑬紅山文化の問題の器のやうに、すくふ部分の後方が筒状になつたものは、殷代のものより多くの量を確実にすくひ取ることが可能だつたと考へられる。恐らく穀物の類――玉器が磨滅するのだから恐らく籾のままの――を首長のやうな者が取り分ける何等かの儀式があつて、そのために日用の骨製品を軟玉で模したものが作られ、その特権的行為を行ふための象徴的な宝器であつた所から死後にも墓に副葬された、といふやうに考へられるのではなからうか。先に引いた図16のやうな遺物は他に出土例が知られないが、このやうな紅山文化の問題の器と同じ機能の想定される特殊な型式の器物が、紅山文化と親縁⑭な仰韶系の文化の遺蹟において、右に記したやうな宗教的、儀式的な性格を持つた遺蹟から出土してゐることは、右に記した筆者の推測に有利な事実と考へられる。とはいへ、紅山文化のこの玉器の用法については、更につめてゆく必要のあることはいふまでもない。また新たな証拠をえて改めて考へたい（一九八八年一一月）。

① 孫、郭一九八四、一四頁、李恭篤一九八六、五〇〇頁、遼寧省文物考古研究所一九八六、九頁。

② 李一九八六、五〇一頁。

③ この図は一九八八年九月～一〇月、神奈川県立博物館で行はれた中国・遼寧省文物展に出陳された遺物のスケッチである。ラベルには「建平県牛河梁一五号墓出土」とあつた。寸法は展覧会事務所で中国人工作員が出陳物のリストで調べてくれたものである。遼寧省文物考古研究所一九八六に発表された一五号墓の遺物（図4）とは形の特徴も寸法も合はない。この展覧会はやつつけ仕事的な杜撰さの目立つもので

あつたから、これも出土地を誤つてゐると見られる。

④ 遼寧省文物考古研究所一九八六、九頁。

⑤ 孫、郭一九八四、一五頁。

⑥ コレクション中の遺物では、この部分は出土後に磨つて使用による凹凸が平らにならされてゐる例を見かけるので注意を要する（例へばアーサー・M・サックラー・コレクション中のもの。〔Lawton et al. 1987, 32a〕美術商が美観を損ねると考へて細工をしたのである。

⑦ 中国社会科学院考古研究所一九八〇、二〇六頁。

⑧ 紅山文化ではウシ、ヒツジ、ブタが家畜として飼はれてゐたと考へられてゐる（中国社会科学院考古研究所一九八四、一七五頁）。

⑨ 見学に当つては農学部家畜生体機構学講座佐藤英明教授のお世話になつた。記して感謝の意を表したい。

⑩ 寧夏文物考古研究所等一九八八、三五一頁。

⑪ 李最雄一九八五、一九八八。

⑫ 甘粛省文物工作隊一九八六、一二頁。

⑬ 林一九八四、一三三―一三四頁。

⑭ 中国社会科学院考古研究所一九八四、一七五頁。

図出所目録

図1 李恭篤一九八六、図版二、5

図2 孫、郭一九八四、図六、1

図3右 文化部文物局、故宮博物院一九八七、八九

左 遼寧省文物考古研究所一九八六、図一一、3

図4 遼寧省文物考古研究所一九八六、図二〇、1

図5 筆者スケッチ

図6 京都大学人文科学研究所考古資料ファイル

図7 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図版一七九、1、右、図一〇二、2

図8 筆者写真

図9 筆者写真

図10 筆者写真

図11 筆者写真

図12 筆者写真

図13 筆者写真

図14 筆者写真

図15 寧夏文物考古研究所等一九八八、図一五、2

図16 甘粛省文物工作隊一九八六、図版二、1、2

図17 京都大学人文科学研究所考古資料ファイル

引用文献目録

甘粛省文物工作隊一九八六「甘粛秦安大地湾九〇一号房址発掘簡報」『文物』一九八六、二、一―一二頁

孫守道、郭大順一九八四「論遼河流域的原始文明与龍的起源」『文物』一九八四、六、一一―一七、二〇頁

中国社会科学院考古研究所一九八〇『殷虚婦好墓』北京

中国社会科学院考古研究所一九八四『新中国的考古発見与研究』北京

寧夏文物考古研究所、中国社会科学院寧夏考古組、同心県文物管理所一九八八「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』一九八八、三、三三三―五五五頁

林巳奈夫一九八四『殷周時代青銅器の研究』東京

文化物文物局、故宮博物院一九八七『全国出土文物珍品選』一九七六―一九八四』北京

李恭篤一九八六「遼寧凌源県三官甸子城子山遺址試掘報告」『考古』一九八六、六、四九七―五一〇頁

李最雄 一九八五「我国古代建築史上的奇迹—関于秦安大地湾仰韶文化房屋地面建築材料及其工芸的研究」『考古』一九八五、八、七四一—七四七、六八五頁
李最雄 一九八八「世界上最古老的混凝土」『考古』一九八八、八、七五一—七五六頁
遼寧省文物考古研究所 一九八六「遼寧牛河梁紅山文化〝女神廟〟与積石冢群発掘簡報」『文物』一九八六、八、一—一七頁
Lauton, Thomas et. al. 1987: *Asian Art in the Arthur M. Sackler Gallery*, Washington

（京都大学人文科学研究所教授）